

1  
月

Jan. | 2023  
沖縄開教本部通信  
vol. 103



# ハイサイ 沖縄

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

## 「沖縄と日の丸」

— 知花昌一氏インタビュー —

### ③ 「読谷村と日の丸」

「海邦国体」において行われた男子ソフトボール競技会場での日の丸掲揚の出来事を聞かせてください。

そのころ僕は三十八歳。読谷村では住民会議が作られ、日の丸掲揚の強制は反対だという署名が集められた。八千四百人が署名し、村民会議が反対を決議。読谷村長も戦争前につながると反対。復帰十五年目の沖縄県で開催される「海邦国体」においても、読谷村は掲揚しないことを決めていた。

大会三日前に出されたプログラムに国旗掲揚は入ってなかった。諸旗掲揚とだけになっていたが、大会事務局に部落解放同盟の人がいて、沖縄の差別のことはよくわかってはいるが、こちらも色々事情があるから掲げてくれというところで、「それなら右端にあげる」ということで決定していた。村旗、国体旗、県旗、協会旗、日の丸を掲げると

いうことで反対に非核宣言の旗を掲げることにした。日の丸は上げるけど君が代は歌わない。前日までそれで決まっていた。

大会が始まる前には事務局がいわゆる「集団自決」のあったチビチリガマに参拝に来た。

当日、僕たちは「平和のための読谷村実行委員会」として、競技場の後ろで反対の横断幕を掲げていた。それで、始まってみれば日の丸が真ん中に揚がっていた。

「話が違うじゃないか」

大騒動になった。それで燃やすぜってことになった。大会自体は成功してほしかったから、大会宣言が終わった後、掲揚台によじ登った。そしてデモの看板を作るために持っていたカッターナイフで日の丸の縄を切り、ライターで火をつけた。

突発的に瞬発的な行動だった。僕は読谷村の意思が、蹂躪、凌辱されたと感じた。村長、議会、住民も反対、八千四百の署名がある中で強制されるわけだから。焼却行為に対して会場から指笛も拍手もあった。

その後、裁判所に自ら出向いた。器物損壊、威力業務妨害で懲役1年執行猶予3年の判決が出た。

「日の丸憎し」ということじゃない。日の丸を焼いた時もバタバタと振りながら焼いたけど、ただ火をつけただけじゃ燃えないので振った。それが裁判所で恣意行為ととられた。屈辱的にしてやろうとかそんな気持ちには全くなかった。

「次号では、知花さんがあれから三十五年たった今の心境をかたつけてくれた。(つづく)」



平和の森球場の掲揚台。日の丸は右端にのポールに揚がるはずだった。

# ハイサイ沖縄

## 沖繩は今! 「世界のウチナンチュ大会」

「第7回世界のウチナンチュ大会」が10月31日から11月3日までの期間、沖繩セルラースタジアム那覇を中心に県内各地で開催された。世界各国に42万人いるとされる「世界のウチナンチュ（沖繩人）」が一堂に会し、沖繩にすむウチナンチュと海外

## 「沖繩別院報恩講」

今年は10月28日と29日に沖繩別院で報恩講が勤まった。Wicoroコナの中で逮夜、日中と土曜礼拝の参加者のほか、久しぶりの顔ぶれ、県外からの参加者などが参拝された。今回の法話は2022年9月から新任された長谷暢輪番が両日ともお

に住むウチナンチュが絆を深め、ウチナー（沖繩）ネットワークの継承となった。大会は5年おきに行われるが新型コロナウイルスの蔓延で一年延期されたため6年ぶりの開催である。

今回の大会のキャッチフレーズは「うちなーのシンカ（仲間）、今こそ結ぶ世界の輪」で玉城知事は「ゆいまる（助け合いの心）、ちむぐくる

（肝心）、いちやりばちよーでー（出会えば兄弟）を満喫してほしい」と海外や県外からの参加者を歓迎した。前夜祭の国際通りでのパレードは、歌や踊り各交流会などで盛り上がりを見せた。閉会式では海外の参加者もうちなーグチをまじえて挨拶し、今後も各国で沖繩文化を紡いでいくことを誓った。次回は2027年の開催予定。

話された。報恩講の準備のお磨きや仏華なども、沖繩別院と縁を結んだ同朋の方々が参加していた

だけ、年中行事を通して自分達のお寺として感じている様子があがえた。ようやく落ち着く気配を見せるコロナ禍であるが、今年もお斎は控えることとした。来年こそは、法話を聴聞すること

に加え、お互いが座談できるお斎のある従来通りの報恩講になることを願うばかりである。



## 「新年のぐ挨拶」

旧年中は、沖繩開教本部・沖繩別院にご厚情を戴き、誠にありがとうございました。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、年末の「除夜の鐘」では沖繩別院の梵鐘も地域の人々の手によって、幾度となく鳴り響きました。この鐘には『無量寿経』の言葉である「兵戈無用（ひょうごがむよう）」を含む一節が記されています。これを建立されたのは沖繩出身の玉代勢法雲師で、ハワイで布教活動に従事されました。彼がどんな思いをこの梵鐘に込めたのか、その記録は残されていないので確かなことはわかりません。しかし太平洋戦争では真珠湾攻撃を、戦後は沖繩戦で壊滅した生まれ島の現状を目の当たりにし、戦後の沖繩復興にはハワイから尽力され「まず人を育てることを」をモットーに、琉球大学の創設にも関わりました。この彼の経験から推測すれば、豊かで安心して暮せる、平和な沖繩を願われたのでしよう。

世界ではウクライナの戦争や地域紛争で人々が亡くなる中、沖繩では戦争に備えるかのように、米軍が強化され、自衛隊が配備されています。今だからこそ「国豊民安 兵戈無用」の經典の言葉を響流十方させたいものです。

輪番 長谷暢